

---

---

# 日本語指示詞の感動詞化

——その異例としての「アレ」——

深 津 周 太

〈名古屋大学〉

---

## 1. はじめに——日本語の指示詞

日本語の指示詞は、実際に現場に存在するものや文脈上の要素を指し示す語彙グループであり、ko-/so-/a-という形態素をそれぞれ語頭にもつ。指示詞の有する現場指示と文脈指示の機能のうち、本稿に関連するのは主に現場指示の用法である。現場指示におけるコソアの意味は、大略以下のようにまとめられる。

表1 現場指示コソアの意味

コ- (ko-)	話し手の近くにあるものを指示
ソ- (so-)	聞き手の近くにあるものを指示
ア- (a-)	どちらからも遠いものを指示

指示詞は統語的特徴により帰納される文法範疇ではなく、単に形態・意味を基盤とする集合体である。従ってそこには様々な品詞の語が含まれる。現代日本語における指示詞の一部を示す。

表2 現代日本語の主な指示詞

	名詞 (事物/場所/方角)	連体詞	副詞	形容動詞
コ- (ko-)	これ / ここ / こちら	この	こう	こんな
ソ- (so-)	それ / そこ / そちら	その	そう	そんな
ア- (a-)	あれ / あそこ / あちら	あの	ああ	あんな

表2のうち、「これ/それ/あれ」の系列が揃って感動詞へと転成することが、指示詞研究の立場からしばしば指摘される。しかし、歴史的テキストを通して感動詞の歴史全体に目を向けると、その指摘が必ずしも的を射ているとは言えない。

本稿では、指示詞「あれ」が感動詞化したとする従来の説に疑問を投げかけ、感動詞「アレ」は本来指示詞とは無関係に成立した可能性について述べる。歴史的事実の検証は歴史的テキストに拠ってなされるべきなのは言うまでもない。この問題をとおして、“言語変化”に対し、現代語の言語感覚を基とした立論をすべきでないことを改めて確認する。

なお、本稿では感動詞をカタカナ表記で示す。そのため、用例の挙示に際して底本の表記を一部変更することがある。

## 2. 指示詞の感動詞化

### 2.1 コソア系感動詞——認知的要因による説明の限度

現代日本語には、指示詞「これ／それ／あれ」と同形の感動詞「コレ／ソレ／アレ」が存在する。金 (2006) が挙げる各語の用例を、以下に引用する。

- ①これこれ、静かにしなさい。
- ②それっ！、行け！
- ③あれ！指切っちゃった。

それぞれ異なる意味用法をもつが、本稿では①のような用法を〈呼びかけ〉、②を〈行為の促し〉、③を〈感動〉と呼ぶこととする。現代語研究における従来の理解では、この「コレ／ソレ／アレ」は、指示詞の一用法<sup>1</sup>とみなされるようである。織田稔 (1994) は、感動詞「コレ／ソレ／アレ」について、「日本語「コソア」の遠近識別の感覚にもとづく指示機能の、感覚的情動空間での展開と解釈」とし、指示詞「これ／それ／あれ」の概念拡張について、認知的要因を用意する。織田氏の説明は、次のようにまとめられる。

#### (1) 指示詞「これ」の転用

例：コラッ、お前ら何をしとるんだ／コレッ、静かにしなさい

⇒目撃状況内で進行する現前の行為に対する強い注意の喚起が「コ」系指示詞の選択となっている。

#### (2) 指示詞「それ」の転用

例：ソレごらんない (略) /ソレ見たことか/ソレ、行け

⇒聞き手のこれまでの行為に対する注意喚起、聞き手との間に了解されている行為への促しが、「ソ」系指示詞の感動詞への転用となっている。

#### (3) 指示詞「あれ」の転用

例：アレ、アレ、これは困った子ね

⇒予期せざる突発事件に対する驚きの気持ち、また予想外の事態への展開に対する狼狽など、これらの感動詞は日本語「ア」系指示詞の「遠」存在、「外」存在への指示機能から転成してきたもの。

しかしこれは、「コレ／ソレ／アレ」が指示詞出自であることを無批判に仮定し、そこから演繹的に組み立てられた論であり、実証に基づく必然的な帰結とは言いがたい。また、「コレ／ソレ／アレ」は現代語に特有の表現というわけではなく、室町時代末期～江戸時代初期の文献にはすでに登場する。用法は現代語とほぼ同様であるが、これらの例も同じ原理で説明が可能であろうか。

(4) コレお侍様。左の足上げさんせ (歌舞伎／女殺油地獄)

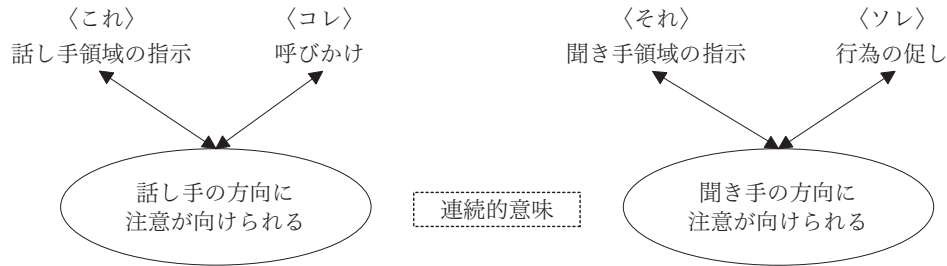
(5) ソレへかうへをはねよとて (説経節／石山記)

(6) アレへおかしや (醒醉笑)

確かに、このうち「コレ」「ソレ」が指示詞と関連をもつことは、その意味的連続から見て妥当性があると思われる。すなわち、感動詞「コレ」は〈呼びかけて聞き手の注意を話し手に向かせる〉ものであり、話し手領域に属する事物 (および情報) を指示する「これ」と、「注意を向かせる方向」という点で一致する。〈聞き手の行為を促す〉感動詞「ソレ」と、聞き手領域に属するものを指示する「それ」も同様の関係にある。

<sup>1</sup> 金 (2006) は「間投詞的用法」とする。

図で表わすと次のとおりである。



ただし、拙稿（2008）では、「これ」の感動詞化はこのような意味の連続から認知的に拡張されたものではなく、近世初期に生じた、統語的条件を前提とする通時的変化として説明した。従って筆者は、意味の連続は変化の要因でなく、付随する結果にすぎないと考える。しかし、いずれにしても、この「コレ」「ソレ」が指示詞に由来するものであることはほぼ動かない。

問題となるのは感動詞「アレ」である。「アレ」は他の二類と異なり、聞き手にはたらきかけるものではなく、話し手が独白に用いる感情表出の表現であり、根本的に前二者とは異なっている。形態が同じという点のみを楯にとって、この「アレ」を指示詞と結びつけるのは、先述のとおり「コソア系感動詞はすべて指示詞に由来するものである」との前提に従う演繹的な立論であり、やや短絡的ではないだろうか。本稿では、感動詞「アレ」について、歴史的な観点から従来とは異なる見方を提示する。

## 2.2 感動詞「アレ」について——「アレ」は指示詞と関係するか

感動詞「アレ」の成立過程について、指示詞からの転成以外の可能性を提示したものに、森田（1973）がある。森田氏は、

- (7) 「あれ」は「あら」から来たものか指示代名詞の転成かさだかでない

との見解を示しているが、それ以上の考察には及んでいない。形態面からその成立を考えると、この「アラ」の存在は無視できない。指示詞>感動詞という品詞を超越する変化は、いわゆる文法化に見るように、一定の条件下においてはありえないものではない。しかしまずは、同じ感動詞の範疇内にミニマルペア (are : ara) の形式があることに注意する必要がある。

結論から述べれば、筆者は「アレ」は「アラ」を淵源とする可能性が高いと考える。文献上、「アレ」が現れるのは中世末期以降であるが、「アラ」は中古の段階ですでに存在するから<sup>2</sup>、変化の方向は逆ではありえない。ただし「アラ」>「アレ」が音声変化として必ずしも蓋然的とはいいがたい。この変化がいかにして起こり得たかを、以下、検討する。

## 3. 感動詞「アレ」成立過程——自由変異群の関係

### 3.1 感動を表わす「アラ」

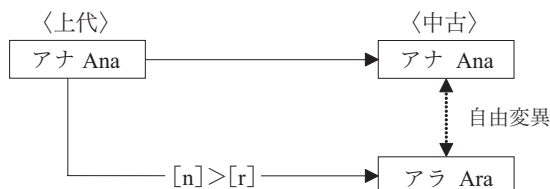
中世前半にはすでに頻繁に用いられる感動詞「アラ」は、限られたパタンの後続文と共起する。「アラ」が共起することが多い構文パターンを、中川（2001）がまとめているので参考としたい。

- (8) a) アラ+形容詞・形容動詞語幹+ヤ Ex. あら忌々しや（平家物語）  
 b) アラ+形容詞・形容動詞語幹+ノ+名詞+ヤ Ex. あらいとほしの者や（平家物語）

2 ただし用例数は少ない。中川（2000）によれば、平安時代の用例は『落窪物語』の2例にとどまるという。用例が増加するのは室町時代以降である。

c) アラ～カナ Ex. あら今はつらい命を助かったものかな（天草版平家物語）

この「アラ」は、古くから用いられている「アナ」が変化した形と見てよいだろう<sup>3</sup>。用法的にも(2)のパターンと一致する上<sup>4</sup>、/n-/r/ は歯茎音同士であることから、音声的にも近く、変異として実現された可能性は高い。筆者の考えを図式化すると以下ようになる。



金（2006）はこの通時的関係を認めず、「共時的な話者の直感として、指示詞とのつながりを認識している事実を重視する」（傍点は筆者）とする。金氏の言によれば、「アラ」は、

- (9) 指示詞「あれ」>感動詞「アレ」>感動詞「アラ」

という道程を経て生じたものということになるだろうか。しかしこれは、文献テキストにおける用例の分布（アラ：古—アレ：新）と合致しない点で歴史的事実にそぐわない。また、歴史的問題に対する説明の根拠を、現代語の内省に求めることにも方法論的な問題がある。

### 3.2 「ヤラ」——「アラ」の音変化

中世末期に至ると、「アナ」は用いられなくなり、「アラ」の勢力がさらに増す。また、「アラ」と同じ用法をもつ「ヤラ」「ヤレ」という二形式が現れてくる。

まず、「ヤラ」について見よう。以下に挙げる(10)の「ヤラ」は、(8b)に挙げた「アラ」の用法に、(11)(12)の「ヤラ」の用法は、(8b)(8c)に挙げた「アラ」のパターンに一致する。

- (10) ヤラ不思議ヤ、終夜ノ間風ニ唖サレテ物思イツルヨ（中華若木詩抄）  
 (11) ヤラ面白ノ景ヤトテ（三体詩抄）  
 (12) ヤラ思ヒヨラヌ声カナ（中華若木詩抄）

ここから、「ヤラ」は「アラ」の自由変異として成立したものと考えるのが妥当であろう。

### 3.3 「ヤレ」——呼びかけ用法と感動用法

一方、中世末期の「ヤレ」には、「アラ」「ヤラ」と同じ用法をもつものと、呼びかけに用いられるものがある。当時の「ヤレ」に二つの用法があったことは、例えば『日葡辞書』（1603-04）および、『志不可起』の記述が一つの徴証である。

- (13) a) Yare (ヤレ)。卑しい人に対しての、おい。  
 b) Yare. L, Yareyare, & c. (ヤレ。または、ヤレヤレ、など)。また、喜ぶ人とか、悲しむ人とかの感動詞。(日葡辞書)  
 (14) 人ニ物ヲ云発語ニ云、又物ヲ感ジテやれやれナド云（志不可起）

『志不可起』の前半部「人ニ物ヲ云発語」は呼びかけ、「物ヲ感ジテ」言う「ヤレヤレ」が、「アラ」「ヤラ」

3 江戸時代前期の話しことばや俗語を集めて考証した『志不可起』（1727）に、「あらモ、あらおもしろナトノあらニテ、古あなト云タルトヒトシキ也」（傍点、句読点は筆者による）と、「アナ」と「アラ」の関係を示唆する記述がある。

4 「阿那多能志」（古語拾遺）、「あな、めでたの、物の香や」（源氏物語）など、ほとんどの例が一致する。

に相当するものと理解できる。当時における、それぞれの用例を挙げよう。

〈呼びかけ〉

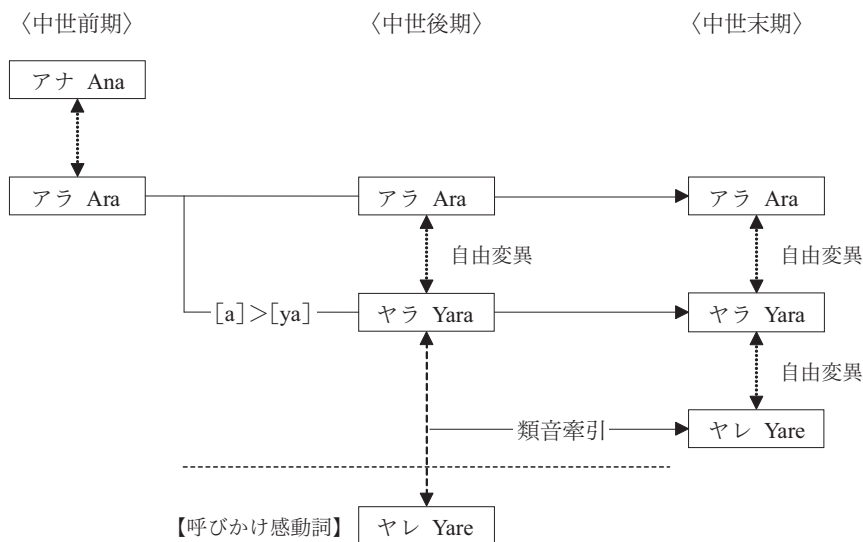
- (15) ヤレト云ハバ、ヨツト云テ可レ答ッキゾ (四河入海)  
 (16) ヤレそれ成はかつらの前か (説経正本／熊谷先陳問答)  
 (17) ヤレ卅一粒ヲ収テ見ヨ (江湖風月集抄)

〈感動〉

- (18) ヤレへうれしや (虎明狂言本・末広がり)  
 (19) ヤレ、おもしろや、えん、京には車、ヤレ、淀に舟 (閑吟集)

文献上は、呼びかけ用法が先に現れる。「ヤレ」が二つの用法を手に入れる過程としては、次のような推測ができる。

- ①「アラ」が音変化し、「ヤラ」という異形態を生み出した<sup>5</sup>。  
 ②元々存在していた「ヤレ」という呼びかけ感動詞が、ミニマルペアである「ヤラ」に牽引され、「ヤラ」と同じ用法を手に入れた。



呼びかけ「ヤレ」とは無関係に、「ヤラ」>「ヤレ」という音変化が生じた結果、完全な同音異義語として二種類の「ヤレ」が存在した可能性もあるが、この場合の /ra/ > /re/ という音変化の蓋然性を主張しうる材料を今もたない。ここでは、中世末期において、「アラ：ヤラ：ヤレ」が同じ用法をもつ形式として共存したことを問題とする。

2.1で述べたように、「アレ」が見られるようになるのは中世末期～近世初期である。以上の流れと関連付けると、それぞれの関係は以下のとおりである。

5 「アラ」と「ヤラ」の関係についての指摘は、中世末期まで遡る。謡曲テキストの語句に解説を加えた『謡抄』(1596-1615)に「やらへ面白(ヲモシロ) あらへと同心與歎。あゝと云詞バ歎。面白之事、日本紀にあるべし」(『田村』: 395)とある。

表3 「アラ」系感動詞と「アレ」の関係

	中世以前	中世前期	中世末期	近世初期
アナ	○	○	○	○
アラ		○	○	○
ヤラ			○	○
ヤレ				
アレ				○

#### 4. 体系の均整

3で述べたように、中世末期の日本語において、「アラ：ヤラ：ヤレ」という3形式が自由変異として存在していたことは疑いない。これらは形態面から、次のように整理できる。

表4 a/ya : ra/re を形態素にもつ感動詞群

	A-	Ya-
-ra	Ara アラ	Yara ヤラ
-re		Yare ヤレ

表のような整理をすれば、ちょうど「Ara アレ」の部分が空白となる。その後、感動詞「アレ」が見られるようになるのは偶然ではないだろう。「アラ」が「ヤラ：ヤレ」に平行する傍形を求めたとも、「ヤレ」が「アラ：ヤラ」に対して傍形を求めたとも、あるいはその両方とも言えるが、とにかく、類推的に「アレ」という形式が生じる条件は、この時点で整っていたといつてよい。すなわち、感動詞「アレ」は、単純に「アラ」が音変化を起こしたのではなく、体系的な要請によって産出されたものと考えられる。

ところで、「アレ」がこれら3形式の自由変異であったならば、成立した段階において「アラ：ヤラ：ヤレ」と用法が一致していなければならない。しかるに、中世末期、江戸初期には次のような用例が見られる。(8)に挙げた「アラ」の用法と一致する。

- (20) アレへおかしや (寛永本醒醉笑) → (8a) に一致  
 (21) アレ、似合ヌ者カナト、我ト我身ヲ咲ゾ (山谷抄) → (8b) に一致

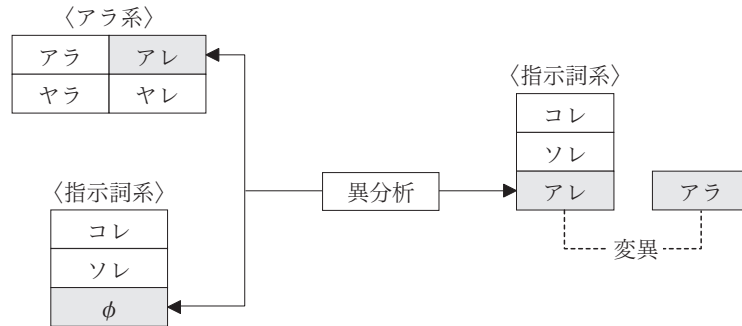
当時の「アレ」の用例のすべてが、必ずしもこのような例ばかりではない点に問題は残るが、感動詞「アレ」は、感動詞「アラ」とその変異群からの形態的類推によって生じたというプロセスは、変化の方向としては蓋然的であると思われる。このように考えた場合、「アレ」はその出自において、指示詞とはなんら関係をもたないことになる。

#### 5. 異分析の結果としての「アレ」

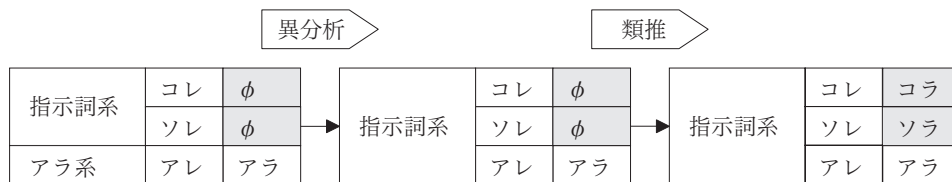
ここでもう一点、「アレ」という形式が一般に受け入れられた理由を考えておきたい。室町末期に「アレ」が成立して以来、現代語に向けて「ヤラ」「ヤレ」が姿を消し、「アラ」「アレ」が残存することには、それなりの理由があるはずである。これには、「アレ」が指示詞「あれ」と同音であることが何らかの形で関係しているのではないか。

2.1で述べたように、近世に指示詞「これ」「それ」が感動詞「コレ」「ソレ」へと転生する。指示詞「あれ」は感動詞とはならなかったが、そのかわりに同音の「アレ」が「アラ・ヤラ・ヤレ」の変異として存在していた。そのため、この「アレ」が指示詞に関係するものと分析し直されたのではないだろうか。その結果、「コ

「レ・ソレ・アレ」がコソア型感動詞として体系的に把握されたため、受け入れられやすく、また残存しやすかったものと思われる。同じくア系の「アラ」も、「アレ」の傍形としてその体系に組み込まれたと考えられる。図示すると次のようになる。



なお、明治期以降、「コレ」「ソレ」に対する「コラ」「ソラ」という変異体が見られるようになるのは、「アレーアラ」というセットへの類推だったのではないか。「アレ」が指示詞系列と異分析されたために、この類推が生じたと考えられる。



以上からも、現代語の感動詞体系は、言語の歴史の変遷の上に成り立ったものであることが分かる。現代語の用例のみから変化の要因を推定することは、方法論的に問題がある。

## 6. まとめ——現代語研究における先入観とその問題

ここまで述べてきたように、歴史的テキストにおける実例を観察する限り、感動詞「アレ」は指示詞とは無関係に生じたと考えるのが蓋然的である。現代語の「アレ」は、その「アレ」が「アラ」とともに（同じ用法で）姿を残したものである。現代語における指示詞「あれ」と感動詞「アレ」の形態的一致は、あくまで結果にすぎないことは、4に述べたとおりである。従来の説は「コレ／ソレ／アレ」が指示詞から派生したものであることを前提とした、非実証的な立論であると言わざるを得ない。

現代語研究により培われた理論を、歴史的考察に援用することの重要性は言うまでもない。しかし、歴史的研究はあくまでも文献資料が示す事実に沿って行われるべきであって、現代語の様相が前提となることはありえない。本稿では、指示詞「あれ」と感動詞「アレ」の関係を通して、言語史研究における認知言語学的・語用論的説明は、実証的なテキスト研究の上に行われて初めて有効性を主張しうることを改めて確認した。

### 参考文献

- 織田稔 (1994) 『直示と記述同定—英語固有名の研究』 風間書房  
 金善美 (2006) 「コ・ソ・アと i・ku・ce の感情的直示用法と間投詞的用法について」 (『言語文化』 8-4)  
 中川祐治 (2000) 「古代における感動詞の構文的機能と特徴について—副詞との連続性の視点から」 (『広島大学教育学部紀要』 第二部第49号)  
 中川祐治 (2001) 「中世語における感動詞の構文的機能と特徴について—原拠本『平家物語』と『天草版平家物語』との比較を中心に」 (『広島大学日本語教育研究』 第11号)

深津周太 (2008) 「指示詞「コレ」の感動詞化—江戸中期における文法変化の過程として」(『日本語学会2008年度秋季大会予稿集』日本語学会)

森田良行 (1973) 「感動詞の変遷」(『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』明治書院)